広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	阮元の地域詩文献における詩会と詩人の記録
Author(s)	市瀬, 信子
Citation	中國中世文學研究 , 74 : 61 - 83
Issue Date	2021-03-29
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00051124
Right	
Relation	

阮元の地域詩文献における詩会と詩人の記録

市瀬信子

一、はじめに

清代は、地域文学、とりわけ詩を地域別に分けて詩集、詩話に記録することが盛んに行われた。

清代は、文学史上、地域性が最も際だった時代である。地域文学を代表するものの主要部分は詩歌であった。故に膨大な数の地域別の詩集、地域別の詩話が編纂されることとなった。その傾向は清代に到ってより顕著となり、地域を対象とする詩文集の数は膨大なものとなった。

その背景にあるのは地方志の編纂である。明清時代は国家事業である『一統志』編纂にともない、その根底となる地方志の編纂が急務となった。『明一統志』は、名勝旧蹟を列挙してそれぞれに詩を付すという体裁で詩が多く採録され、地方志もまた名勝旧蹟・山川・風俗など、様々な箇所に詩が使われることとなった[1]。この傾向は明から清へと続いた。更に、清代の地方志には「文苑伝」、「芸文志」といった項目がある。明清時代の地方志の芸文志には、書目の他に詩歌も掲載するのが通例であった[2]。そこに資料を提供するために、地域別の詩集や詩話が次々に編纂された[3]。

地方志の編纂は、宋代以後官僚が携わるようになったのであるが、清代では、地域詩総集の編纂にも、官僚が関わることが多くなった。そうした中で、揚州出身の阮元（一七六四～一八四九）も、浙江学政として赴任した折、詩に関する地方文献として、揚州一帯の詩の総集『淮海英霊集』を編纂し、揚州の詩話ともいえる『広陵詩事』をまとめ、更に浙江詩の総集である『両浙輶軒録』『両浙輶軒録補遺』の編撰に携わった。これらの作品は、ほぼ同時期に編撰されている。

揚州と浙江の二つの地域は、詩に於いては結びつきが強い。なぜなら、揚州詩壇には浙江詩人が多く移動して詩会で活躍していたからである。揚州は、地域を越えて詩人を迎えた詩会が隆盛であった地であり、浙江は地域を越えて外に詩人達が出て行った地である。

地方志の時代に、地域ごとの詩を記録した詩集を編纂しようとする機運が高まったことは先に述べたとおりであるが、揚州と浙江のように地域を越えた詩会は地域という基準の中でどう記録されたのであろうか。

本稿では、阮元の両地域の地域詩文献を通して、地域を越えた詩会とその詩人達が各地域の文献にどのように記録されたかを検証してみる。それにより、阮元が地域の記録にどのように取り組んだかを明らかにしてみたい。

二、清代の地域詩集と地域詩話

先に述べたとおり、清代は地方誌の編纂が盛んになった時代である。その状況をまず確認しておく必要がある。地方誌編纂事業の拡大は、三次に及ぶ『大清一統志』の編纂に関わるものと考えられる。第一次『大清一統志』の纂修は、康熙二十五年から乾隆五年にかけて行われ、初修『大清一統志』は全三百五十六巻であった。第二次は乾隆二十九年から乾隆五十年にかけて纂修され、全四百六十巻、第三次は嘉慶十六年から道光二十二年にかけて纂修され、全五百六十巻であった。全国を網羅し、時代を追うにつれて大部になってゆく『一統志』には、各地方ごとの資料が広く求められることになった。ゆえに地方誌の編纂も、明以前とは比べものにならないほどの頻度、規模で行われるようになった。たとえば、清代の地方志は歴史上最も多く、現存するもので六千種近いとする説もある[4]。

清代は地方志の数の増加と連動するように、地方詩の総集の数も増加している。蔣寅は、清代の地域性詩文集の数量が激増し統計は難しいとしながら、『中国叢書総録』集部総集類の郡邑に関するものが七十七種あることを指摘し、中国社会科学院文学所に所蔵される地域詩文総集が約四百種あるとする。松村昂『清詩総集叙録』（汲古書院、二〇一〇）は、百五十七種を記載するが、そのうち、全国的総集が八十種、地方的総集が七十七種であり、地域という区分が詩文の中でいかに大きな比重を占めているかを示している。

一方、詩話について見てみると、蔣寅『清詩話考』（中華書局、二〇〇五）の「清詩話見存書目」には、郡邑詩話として四十種以上を収録している。郡邑詩話とは地方詩話、地域詩話とも称されるもので、蔣寅は郡邑詩話の中に阮元『広陵詩事』を入れている。こうした、地域の詩に関する文献が盛んに編纂された時代に、ひときわ高い評価を受けたのが阮元の総詩集、詩話である。

二、阮元の地域詩文献

阮元は、字を伯元といい、芸台（うんだい）と号した。江蘇儀徴の人で、乾隆五十四年（一七八九）の進士である。学者として、自らが中心となり『経籍籑詁』、『十三経注疏校勘記』、『疇人伝』、『皇清経解』等の編纂に携わる一方、地域詩文献の編纂にも力を注いだ。阮元は乾隆六十年（一七九五）三十三歳の時に山東学政から、浙江学政に転じると、出身地の儀徴を含む揚州一帯の清初からの詩人とその詩を集め、『淮海英霊集』の編纂に取りかかった。これが地域詩文献に関わった最初である。『淮海英霊集』序

に「乾隆六十年、自山左学政、奉命移任浙江、桑梓非遙、徵訪較易、遂乃博求遺籍、徧于十二邑（乾隆六十年、山左学政より、命を奉じて任を浙江に移し、桑梓遥かに非ず、徵訪較や易く、遂に乃ち博く遺籍を求め、十二邑に遍し）。」とある。また任地についた翌年嘉慶元年（一九七六）には、地元の人員を組織して、浙江の詩歌を収集した。これが『両浙輶軒録』編纂の始めである。任務の最終年である嘉慶三年（一九七八）正月に『淮海英霊集』は完成し、四月に『両浙輶軒録』も完成する。『両浙輶軒録』については、「書成、存之学官、未及刊板。（書成り、之を学官に存するも、未だ刊板に及ばず）」（『両浙輶軒録』阮元序）とあるとおり、一度完成をみるも、刊行には至っていなかった。翌嘉慶四年（一七九九）、『淮海英霊集』に収めきれなかった詩事を集めた『広陵詩事』が制作される。『広陵詩事』は嘉慶六年（一八〇一）に刻された。また『両浙輶軒録』の内容に満足できなかった阮元は、同嘉慶六年『両浙輶軒録補遺』を刊行する。阮元は更に嘉慶十三年（一八〇八）に従弟の阮亨と王予に命じて『続淮海英霊集』を編纂させた[5]。

これらの地域詩文献のうち、『両浙輶軒録』『補遺』は、官僚として、赴任地の詩集を編纂したものである。「輶軒」とは、自序に「乗輶軒采風（輶軒に乗りて風を采る）」とあるのによる。「輶軒」は、天子の使者の乗る車で、松村昂によると、学政および巡撫を指すものである[6]。つまり、学政という立場から編纂に取り組んだものである。一方『淮海英霊集』は、浙江学政となり、故郷揚州近くに来たことで、資料が集めやすいと考え、自ら進んで編纂に取りかかったものである[7]。それぞれ多くの協力者を得て編纂しているが、『両浙輶軒録』は、編纂事業を多くの人々と共に行っており、凡例に「分任採訪諸人」として二十名以上の人名をを挙げている。一方『淮海英霊集』は、自らが中心となり、故郷の知識人達の助けを借りて編纂に取り組んだ。自分の意思で始めた作業であったためか、非常に熱心に資料を収集し、『淮海英霊集』で取り込めなかったものを集めて、自ら『広陵詩事』を撰して収録し、この二種をもって、揚州詩壇の全貌を記録しようとした。そして『広陵詩事』には、詩人を個人別に扱う詩集には入れられなかった詩会の記事を多く収録する。

『両浙輶軒録』には『広陵詩事』にあたるものは作られておらず、当時もっとも詩会が盛んといわれた杭州詩会の様子をまとめて記録したものは無い。自らが中心となって取り組んだ揚州の記録に詩会を多く取り入れたことは、阮元が詩会を重要なものと考えていた証左となるだろう。

ところで、阮元が扱った揚州と浙江には、ある共通点

がある。それはいずれも清代前半期に詩会が盛んであったという点である。特に揚州は、交通の要衝であり、塩商らの豊かな私財が文化事業に注がれたこともあり、外からの客人を多く迎え入れて、詩壇は一時の隆盛を謳われた。王漁洋、孔尚任、盧見曾ら官僚が開催した紅橋修禊の詩会は、全国にその名を知らしめた。一方浙江は、西湖を擁する杭州を中心に、詩会の地として名を馳せてきた。

またもう一つの共通点は、清王朝にとって、警戒すべき地域であったことである。浙江は、雍正年間に入ってから、大きな文字獄が連続し、雍正四年には、雍正帝は「浙江風俗悪」として、浙江の郷試、会試を停止している[8]。

しかし、揚州もまた、清朝にとって警戒すべき地であった。四庫全書のための聚書が乾隆三十七年に始まったが、その折に江蘇浙江が最も危険視されていた。

「此等筆墨妄議之事、大率江浙両省居多。（此等筆墨妄議の事は、大率江浙両省多に居る。）」（『清実録』巻九百六十四　乾隆三十九年八月）及び、「故前後購獲応燬禁書籍。較江浙両省尤多。（故に前後して応に燬禁すべき書籍を購獲す。較ぶるに江浙両省尤も多し。）」（『清実録』巻一千二十二　乾隆四十一年十二月）とあるように、処分すべき禁書が江蘇浙江両省にとりわけ多いとしている。こうした地域的環境が悪しき風俗を育てるというわけである。蔵書家が活躍した代表的な地域が揚州と浙江である。詩会の盛んな地方都市は、科挙の道を選ばない文人が、蔵書家や富商のもとで盛んに詩作や著作に励んだ地域でもあった。

しかし、揚州詩会と浙江詩会には大きく異なる点がある。揚州は他地域からの詩人を多く迎え入れて詩会の隆盛を迎えた。一方浙江は杭州を中心とし、地元の詩人を中心とした詩会が盛んであった。更に、浙江は揚州に詩人達を送り出し、各地の詩会の中心は、一時浙江詩人達という状況であった。この当時の様子は、王昶『湖海詩伝』に次のようにある。

揚州鹺商所萃、喜招名士以自重。而馬氏秋玉佩兮小玲瓏山館、尤為席帽所帰。時盧雅雨任運使、又能奔走寒畯。于是四方輻輳、而浙人尤多、如全謝山祖望、陳楞山撰、厲太鴻鶚、金寿門農、陶篁村元藻及授衣弟江皐、尤以領袖称。

（『湖海詩伝』巻六　陳章）

揚州は鹺商の萃まる所、喜んで名士を招きて以て自ら重んず。而して馬氏秋玉佩兮小玲瓏山館は、尤も席帽の帰する所と為る。時に盧雅雨任運使、又能く寒畯に奔走す。是に于いて四方輻輳し、而して浙人尤も多く、全謝山祖望、陳楞山撰、厲太鴻鶚、金寿門農、陶篁村元藻及び授衣の弟江皐の如き、尤も領袖を以て称せらる。

揚州詩壇は、また浙江詩人の活躍の場でもあったのである。揚州詩会のように、他地域から官僚として、あるいは客人として招かれた詩人達が詩会の中心で活躍した場合、揚州詩人だけをとりあげても、揚州詩壇の実態を捉えることにはならない。他郷の詩人を地域文献に収録するかどうか、収録するならどういう形をとるのか、は文献によって扱いが分かれる部分である。阮元はどういう答えを出したのか、彼の編纂した文献を調査し、文学を地域で区切ることの問題を阮元がどう捉えたかを具体的に見てゆく。

三、『淮海英霊集』と『広陵詩事』

『淮海英霊集』の「淮海」とは、「『清史稿』巻五十八の「揚州府、領州二（高郵・泰）、県六（江都・甘泉・揚子（すなわち儀徴）・興加・宝応・東台）」の九邑と、「旧（も）と揚州に隷（したが）いし」（「凡例」）「通州直隷州、領県二（如皐・泰興）」の三邑を含む十二邑であり、旧時の揚州を指す。また、採録するのは、凡例に「今録詩托始国初（今詩を録するに托するは国初に始む）」「所録詩人、皆以已故者為断（録する所の詩人、皆故者を以て断と為す）」とあるとおり、清初から、乾隆年間の詩人で故人である者を対象とする。収録された詩人は八百六十五名、詩は一千四百八十八篇に及ぶ。この詩集を編纂した理由について、阮元は序の中で次のように述べる。

余之録此集、非敢取郷先生之詩衡以格律而選定之也、亦非藉已故詩人為延誉計也。広陵耆旧零落百余年矣、康熙、雍正及乾隆初年已刊専集漸就散失、近年詩人刻集者鮮、其高情孤調卓然成家者固多。即残篇断句僅留于敝簏中者亦指不勝数、亟求之猶懼其遺佚而不彰、遅之又久不更替乎。且事之散者難聚、聚者易伝。後之君子、懐耆旧之逸轍、采淮海之淳風、文献略備、庶有取焉。

（「淮海英霊集序」『揅経室二集』巻八）

余の此の集を録すは、敢へて郷先生の詩を取りて衡（はか）るに格律を以て之を選定するに非ざるなり、亦た已に故りし詩人を藉りて延誉の計を為すに非ざるなり。広陵の耆旧零落すること百余年にして、康熙、雍正及び乾隆初年已に専集を刊するも漸く散失に就き、近年詩人の集を刻する者鮮きも、其の高情孤調卓然として家を成す者固より多し。即ち残篇断句僅かに敝簏中に留むる者も亦た指もて数ふるに勝へず、亟（すみ）やかに之を求むるも猶ほ其の遺佚して彰かならざるを懼れ、之を遅くせば又久しく更替せざるか。且つ事の散ずる者は聚め難く、聚まる者は伝へ易し。後の君子、耆旧の逸轍を懐ひ、淮海の淳風を采るに、

文献略ぼ備はれば、庶（こいねが）はくはこれに取る有らん。

阮元によれば、この詩集は、格律の基準によって選別したり、物故詩人の名誉を頌揚するためのものでもない。清初の揚州詩人達が世を去り詩壇が衰退して百年余り、康熙（一六六二～一七二二）・雍正（一七二三～一七三五）から乾隆（一七三六～一七九五）の初めごろまでの七、八十年余りの間に刊行された詩の専集は、嘉慶年間に入った今、すでに徐々に散逸し始めている上に、優れた詩人が多くいるにも関わらず、近年は詩集の刊行も少なくなっているという。更に、詩集にならない詩句の断片も多く残るが、これもまた失われて消えてゆくという。このように、失われゆく清代揚州の詩を集めて後世に伝える、というというのが阮元の意図であった。最後の「庶有取焉」とは、『淮海英霊集』を資料として、地方志などに記録されることを願うものである。

『淮海英霊集』が地域資料とする目的で編纂されたことを示すのは、凡例の一つに「毎人各為小伝数行、以紀爵里事蹟、或以詩存人、或以人存詩、譌舛遺漏誠恐不免、尚希同志、諒而増改之。（毎人各おの小伝数行を為し、以て爵里事蹟を紀し、或ひは詩を以て人を存し、或ひは人を以て詩を存すも、譌舛遺漏誠に恐らくは免れず、尚ほ同志の、諒して之を増改せんことを希ふ。）」とあるとおり、詩人の伝記、爵里事蹟を記し、刊行後に訂正があれば更に増改を望み、詩人の記録として正確であることを目指していることからも推察できる。

阮元が『淮海英霊集』などの編纂に取り組んだ時期は、地方誌編纂が最も盛んな時代であり、また嘉慶年間以降に編纂された『揚州府志』以下、県志などには、『淮海英霊集』『広陵詩事』から引かれた記事が多く採録されていることから、阮元の目的は果たされたといってよい。

さて、収録する詩人や詩会について述べている凡例を挙げると以下のようになる。

一、外省人入籍揚州、其生卒在揚州者、方入録、若流寓詩人、本極繁多、且昔王漁洋司寇、盧雅雨転運、馬秋玉徴君等、招集名流觴詠尤盛、多不勝収、当俟另纂。

一、外省人の揚州に入籍するは、其の生卒の揚州に在る者にして、方（はじ）めて録に入る。流寓の詩人のごときは、本より極めて繁多なり。且つ昔王漁洋司寇、盧雅雨転運、馬秋玉徴君等、名流を招集し觴詠尤も盛んにして、多くして収むるに勝へず、当に另纂を俟（ま）つべし。

この凡例では、本籍が揚州でない場合、揚州で生没し

た者以外は記録しない、という厳しい方針を示す。しかし、流寓の詩人が極めて多いこともまた認めている。また、王士禛（漁洋）、盧見曽（雅雨）、馬曰琯（秋玉）らが名士を招いて主催した文宴つまり詩会が盛んであったことも述べている。馬曰琯は、揚州塩商であるが、王士禛、盧雅雨は山東から揚州に赴任した官僚として、大規模な詩会である「紅橋修禊」を開催し、揚州の盛事と讃えられた。しかし王士禛、盧雅雨は揚州人ではなく、生没も揚州ではないため、彼らは『淮海英霊集』には収録されない。ただその多くの詩会については、詩集とは別に編纂するとしており、揚州詩壇にとって欠かせない出来事であったことを認めている。

揚州人以外は地域詩集に収録しない、という方針は、実は当時の地方詩集としては特異なものであった。当時の地方誌及び地方詩集には、他郷からの流寓の詩人、訪れた著名人の活躍を載せることで当地の文化の隆盛を際だたせようという例が多かったからである。蔣寅は、地域詩集や詩話が「流寓」といわれる他の地からの詩人の作品を多く収録し、そのことが当地の誇りとなるものであったこと、そうした本地の風物名勝をとりあげる詩文が地方志の芸文志に収録され、地域詩集や詩話緒を補う役目も果たしたことを指摘する[9]。

阮元は、あくまでも流寓の詩人を地方詩集に入れることを拒んだが、後に阮亨らが編纂した『淮海英霊続集』では、凡例に、「外省人入籍揚州、仍載明原籍、其流寓詩人亦分別載入。」と、外地の人で後に揚州籍となった人物は原籍を明記し、流寓詩人は、揚州人とは別に採録するとしており、事実、『続集』の方は、『淮海英霊集』より遥かに広い地域の詩人を収録している。阮元の地域文献における地域の限定がいかに厳しかったのか、またそれが当時一般的ではなかったかがこうした編集方針の変更からも見て取れる。

更に、詩会の記録については次のように述べる。

一、忠孝節義之事蹟、及讌会之韻事、園亭之廃興、彝言名句之流伝、書画古器之賞鑑、元已別為広陵詩話若干巻、俟定稿後再為付梓。

一、忠孝節義の事蹟、及び讌会の韻事、園亭の廃興、彝言名句の流伝、書画古器の賞鑑、元已に別に広陵詩話若干巻を為り、稿を定むるを俟ちて後再び為に梓に付す。

この凡例では、『広陵詩事』の方に入れる内容を具体的に挙げる。忠孝節義、讌会の韻事、彝言名句、書画古器などである。このうち、「讌会の韻事」は詩会であり、「園亭の廃興」とある園亭の多くは、詩会の地となった

ものを取りあげている。つまり詩会については『淮海英霊集』には記録せず、『広陵詩事』にその役割を預けるということである。

ここで『広陵詩事』序でその編纂意図を確認する。

余輯淮海英霊集既成、得以読広陵耆旧之詩、且得知広陵耆旧之事、随筆疏記、動成巻帙、博覧別集、所獲日多、遂名之曰、広陵詩事。……大指以吾郡百余年来名郷賢士、嘉言懿行、綜而著之。庶幾文献可徴、不致零落殆尽。且余生于諸耆旧百余年後、亦藉此収羅残缺、以尽後学之責也。退食余閑、検付弟亨、子常生鈔録成書、将以付刻。至于爵里族姓或有舛誤、遺聞佚事、再当補述。尚望同志君子訂而続之。

余 淮海英霊集を輯して既に成り、以て広陵耆旧の詩を読むを得、且つ広陵耆旧の事を知るを得、筆に随ひ疏に記し、動もすれば巻帙を成し、別集を博覧し、獲る所日に多く、遂に之に名づけて広陵詩事と曰ふ。……大指は吾が郡百余年来の名郷賢士、嘉言懿行を以て、綜べて之を著はさんとす。文献徴すべく、零落殆尽を致さざらんことを庶幾ふ。且つ余諸耆旧百余年の後に生まれ、亦た此を藉りて残缺を収羅し、以て後学の責を尽くすなり。退食の余閑、検するに弟亨、子常生に付して鈔録成書せしめ、将に以て刻に付さんとす。爵里族姓に或ひは舛誤、遺聞佚事有るに至っては、再び当に補述すべし。尚ほ同志君子に訂して之を続けんことを望む。

『広陵詩事』は、『淮海英霊集』編纂の時に揚州の詩人、事蹟について多く知り、書き留めたものが多くなり、『広陵詩事』としたという。また、『淮海英霊集』と同じく、散逸してゆく揚州の嘉言善行を記そうというのは、『広陵詩事』という題にあるように、詩に関わるものがやはり多い。また『淮海英霊集』と同じく記録が散逸することを恐れ、文献を収集したという。また記した爵里族姓などに誤りがあれば訂正を加えてほしいと願うのは、揚州地方誌の資料たるべき意義を持たせているのである。しかし、詩会について『広陵詩事』序は全く触れていない。

四、『両浙輶軒録』

次に『両浙輶軒録』の編纂方針について見ておく。凡例に、収録する人物について次のようにいう。

一、是編始自国初、迄於近年、皆取其人已往、可以論定者録之。

是の編は国初自り始め、近年に迄りて、皆な其の

人の已往の、以て論定すべき者を取りて之を録す。

この文章について、松村昂は、「これは要するに、例えば、すでに思想犯の烙印をおされた呂留良（嘉興府石門県の人、一六二九～一六八三）などは採録しないことを意味するだろう。」と述べている[10]。官僚の立場で浙江という問題の多い地の記録を作成する際には、朝廷にとっての犯罪者を除外するというのは、必要な措置であった。

先に、阮元は地方志を編纂する資料として、地方詩総集を編纂したことを述べたが、当時の地方志編纂には、朝廷の目が光っていた。『大清一統志』編纂に際しては、乾隆帝が自ら検閲を行い、また地方志編纂についても、厳格に審査し、文字獄の対象となったことが、すでに指摘されている[11]。

その地方志に掲載されるべき資料は、やはり厳しい審査を通るべく、人物を選ばざるを得なかったといえる。『淮海英霊集』は私的な編纂であったため、こうした方針を示す凡例はないのだが、阮元の心理としては、やはり同様に慎重な態度で臨んだであろうと思われる。

一、諸大家宏編鉅集、行世已久者、略採数編、以備一家。其有未刻遺稿者、転多録之、以防散佚。

一、諸大家の宏編鉅集の、世に行われて已に久しき者は、略ぼ数編を採り、以って一家に備う。其の未だ刻せざる遺稿有る者は、転た多く之れを録し、以って散佚を防ぐ。

これは、有名人でその別集が長く世に出ているものについては作品数を少なくし、遺稿が未刊のものを収録し、散逸を防ぎ記録として残すという方針を述べたものである。この詩集が、阮元の詩の主張によるものでなく、地方の資料として欠落のないものとするという方針で編纂されたことを示すものである。

『両浙輶軒録』の凡例は、地方官僚としての態度を強く打ち出したものであるが、その中では流寓に触れることがない。しかし『両浙輶軒録』も、当地以外の客人や流寓の詩人を収録しない。凡例にはないが、編纂方針は、『淮海英霊集』と同じ考えで編纂されたと言ってよいだろう。

詩会については、凡例では触れていないが、『両浙輶軒録』には『広陵詩事』にあたるものがない。では、詩会の記録は取り入れられたのだろうか。詩会の詩人をとりあげながら、検証してみることとする。

五、韓江雅集

揚州と浙江の詩会の詩人の記録を見るにあたって、調査の対象とするのは、韓江雅集の詩人達である。なぜなら、韓江雅集は揚州の詩会でありながら、その中心にいたのは浙江詩人達だからである。浙江詩人の多くは揚州に長年に渡って居住しており、浙江での作品より揚州での作品の方が多いという詩人も多い。しかし揚州人ではないため、揚州の記録には残されない。地域を越えて活動した韓江雅集の詩人たちは、各地域文献にどのように記録されたのかを調べることは、地域文献の時代の詩人のあり方を知ることにもなると考えられる。

まず簡単に韓江雅集について説明しておく。清代の乾隆初期、揚州では富裕な塩商たちが、巨大な財力をもって、各種文化事業を支えた。揚州塩商の代表格が馬曰琯・馬曰璐兄弟である。彼らは豊富な蔵書を誇り、学者文人の研究、編纂事業を支援しつつ自身も事業に参加する知識人であった。馬氏は自らの邸宅や園林で詩会を開催した。また周辺の塩商も場を提供しつつ詩会に参加した。その詩会が韓江雅集であり、詩社として韓江吟社の名称もある。韓江はまた邗江とも表記される。詩会の唱和詩を収めた詩集が『韓江雅集』であり、収録された詩の数は聯句を含め九十首、詩人は四十一名、収録期間は乾隆八年～十二年の六年間にわたる。清代の詩会の詩集としては、最も大規模なものである。阮元『広陵詩事』の中から、詩集『韓江雅集』について記す部分を見てみる。

馬曰琯（秋玉）、曰璐（半査）兄弟並好客、主持風雅、勒其朋侶游宴之詩為韓江雅集十二巻。与斯集者、則有胡期恒（号復翁、本湖南人、官左都御使。生於揚州、故在揚亦自号里人。然曽為江西布政使、是以不録入淮海集）、唐建中（字南軒、天門人、康熙癸巳庶常）、程夢星、汪玉枢、厲鶚（銭塘人、孝廉）、方士庶、王藻、方士庭、陳章（銭塘人）、閔華、陸鍾輝、全祖望（鄞県人、庶常）、張四科、史肇鵬、楊述曽（陽湖人、編修）、洪振珂、鄭江、張世進、趙昱（仁和人）、丁敬（銭塘人）、杭世駿（銭塘人、編修）、趙信（仁和人）、趙一清、戴文灯（帰安人、丁丑進士、礼部員外郎）、陳祖范（銭塘人）、査祥、邵泰、姚世鈺（帰安人）、王文充（江都人、編修）、劉師恕、程士槭、楼錡（字于湘、長洲人）、団昇、陸錫疇諸名宿。

（『広陵詩事』巻七）

詩会を記載する『広陵詩事』では、参加者を非常に詳細に記録する。『韓江詩集』には四十一名の詩人が見えるが、『広陵詩事』にはそのうち、三十六名を収録する。『広陵詩事』の数年前に刊行された『揚州画舫録』に収録する『韓江雅集』の詩人数は三十名であり、それよりも多くの詩人を収録している。また、『韓江雅集』には、出身地を記していないが、阮元は出身地を記している。それによって、揚州以外の詩人が多く参加したことがわかる。

そこで、韓江雅集の詩人について、揚州の詩人と浙江

の詩人について、その記録のしかたを『淮海英霊集』、『広陵詩事』、『両浙輶軒録』などで調査し、他の地域詩文献との比較を通して、阮元の編纂の特徴を明らかにしてみたい。

六、『韓江雅集』の揚州人の記録

韓江雅集の主催者の中で、今回は最も代表的な馬曰琯・馬曰璐兄弟である。

『淮海英霊集』の馬曰琯小伝には以下のようにある。

馬曰琯、字秋玉、一字嶰谷、本籍祁門、業鹺揚州、遂家焉。乾隆丙辰、挙博学宏詞不就。聖駕南巡、両賜御書。生平勤学好客、一時夙儒名士、造廬授館無虚日、酷愛典籍、有未見書、必重価購之。世人願見之、書如朱検討経義考之類、不惜千百金付梓。以故叢書楼所叢書画碑版、甲于江北、癸巳奉旨搜訪遺書、時徴君已没、其家恭進蔵書、可備採用者、至七百七十六種、降旨褒美、並蒙御題所進鶡冠子詩一首、賜古今図書集成一部、又賜平定伊犁金川詩、并得勝図。徴君詩纏綿清婉、格韻並高、長洲沈宗伯徳潜、以為峭刻得山之峻、明浄得水之澄。著沙河逸老集六巻、嶰谷詞一巻、文集若干巻。徴君昆弟業鹺、貲産遜于他氏、而卒能名聞九重、交満天下、則稽古能文之效也。当時擁重貲過于徴君者、奚翅什伯、至今無人能挙其姓氏矣。

（『淮海英霊集』乙集　巻三）

馬曰琯、字秋玉、一の字は嶰谷、本籍は祁門、鹺を揚州に業とし、遂にこれに家す。乾隆丙辰、博学宏詞に挙げらるるも就かず。聖駕南巡し、両たび御書を賜る。生平学に勤め客を好み、一時の夙儒名士、造廬授館して虚日無し、酷だ典籍を愛し、未だ見ざるの書有らば、必ず重価もて之を購ふ。世人之を見んことを願はば、書の朱検討経義考の類のごときは、千百金を惜しまず梓に付す。故を以て叢書楼に叢むる所の書画碑版、江北に甲たり、癸巳奉旨して遺書を捜訪するに、時に徴君已に没し、其の家蔵書を恭進し、採用に備ふべき者、七百七十六種に至り、降旨褒美され、並びに御題進むる所の鶡冠子詩一首を蒙り、古今図書集成一部を賜り、又伊犁金川を平定するの詩を賜り、并びに勝図を得。徴君詩は纏綿清婉、格韻並びに高く、長洲沈宗伯徳潜、以て峭刻は山の峻を得、明浄は水の澄を得ると為す。沙河逸老集六巻、嶰谷詞一巻、文集若干巻を著す。徴君昆弟鹺を業とし、貲産他氏に遜るも、而も卒に能く名は九重に聞こえ、交はり天下に満つるは、則ち稽古能文の效なり。当時重貲を擁すること徴君に過ぐる者、奚ぞ翅（なんただ）に什伯のみならんに、今に至るまで人の能く其の姓氏を挙ぐる無きなり。

これが馬曰琯の小伝である。詳細に記されるのは、皇帝南巡時に得た栄誉であり、四庫全書纂修に際して膨大な蔵書を提供したことに対して賜った御題、御詩、古今図書集成などの下賜品である。清朝の地方文献では、このように皇帝から賜った栄誉が記録の最優先事項であった。南巡の地は清朝が警戒する地であり、蔵書はその警戒の対象でもあったため、蔵書の供出とそれに対する朝廷の賞賛は、地方文献としては記さねばならない事項であった。では、詩会についてはどうか。「生平勤学好客、一時夙儒名士、造廬授館無虚日」は、多くの学者を招き、住まいを用意して支援したことを述べているが、詩会のことは言っていない。『淮海英霊集』凡例には、「馬秋玉徴君等、招集名流觴詠尤盛、多不勝収。」とあったように、馬曰琯の詩宴の知名度は高く、そのことを阮元も十分認識しているのであるが、『淮海英霊集』には関連の記載すらない。一方、弟の馬曰璐の小伝は以下のようにある。

馬曰璐、字佩兮、号半査、秋玉徴君之弟。博学工詩、与兄斉名、称揚州二馬。乾隆丙辰、通政使趙之垣、薦挙博学宏詞、不就。家在東関街、嘗即街南搆書屋、為蔵書讌集之地、又曰小玲瓏山館、有看山楼諸勝。始馬氏得太湖石甚佳、建山館置之、而以小玲瓏名。適隣家不便其立、半査乃語兄止之、及山館帰汪雪礓、本石始立焉。半査詩、見于邗江雅集、林屋唱酬録者最多、所著有南斎集。

（『淮海英霊集』乙集　巻三）

馬曰璐、字は佩兮、半査と号し、秋玉徴君の弟。博学詩に工にして、兄と名を斉しくし、揚州二馬と称さる。乾隆丙辰、通政使趙之垣、薦めて博学宏詞に挙ぐるも、就かず。家は東関街に在り、嘗て即ち街南に書屋を搆へ、蔵書讌集の地と為し、又小玲瓏山館と曰ひ、に山楼の諸勝有り。始め馬氏太湖石を得ること甚だ佳にして、山館を建てて之を置き、小玲瓏を以て名づく。適たま隣家其の立つるにに便ならざれば、半査乃ち兄に語りて之を止め、山館の汪雪礓に帰するに及び、本石始めて立つ。半査の詩、邗江雅集、林屋唱酬録に見ゆる者最も多く、著す所に南斎集有り。

馬曰璐の項は、馬曰琯の後に続いているため、南巡のことなどはここでは省略し、博学鴻試に推薦されたことの他、こちらは馬氏兄弟の詩に関する情報を多く載せる。馬氏の小玲瓏山館は「蔵書讌集之地」とされ、「讌集」つまり詩会が開催されたことを記している。また『邗江雅集』『林屋唱酬録』等、唱酬詩集に馬曰璐の詩の多くが収録されると述べ、彼が詩会を中心とした詩作活動を行っ

たことを記している。詩会については記さない方針をとる『淮海英霊集』だが、韓江雅集の主催者である馬氏については、弟の曰璐の項に詩会を行った事実を記す。ただし詩会がどのように開催されたか、どのような人物が参加したのか等、詳細には触れない。

一方、『広陵詩事』における馬氏兄弟の記載はどうであろうか。『広陵詩事』巻三は、複数で活動した詩人の記録を載せる。その中に馬氏兄弟は登場する。

馬秋玉徵君（曰琯）、半査（曰璐）昆弟并嗜古能詩。家蔵書籍極富、貯叢書楼。装丁致精、書脳用名手宋字、数人写之、終年不能輟筆。乾隆中開四庫館、其家恭進可備採用之書七百七十六種、優詔褒賞古今図書集成一部。又性好交遊、四方名士凡過邗上者、款留觴詠無虚日。結邗江吟社、与昔之圭塘玉山相埒。銭塘厲太鴻徵君（鶚）、陳授衣（章）、帰安姚玉裁秀才（世鈺）皆館其家。

（『広陵詩事』巻三）

馬秋玉徵君（曰琯）、半査（曰璐）昆弟并びに古を嗜み詩を能くす。家に書籍を蔵すること極めて富み、叢書楼に貯ふ。装丁致精にして、書脳に名手の宋字を用ひ、数人もて之を写さしめ、終年輟筆すること能はず。乾隆中 四庫館を開き、其の家採用に備ふべきの書七百七十六種を恭進し、優詔もて古今図書集成一部を褒賞さる。又性 交遊を好み、四方名士の凡そ邗上に過ぎる者、款留觴詠して虚日無し。邗江吟社を結び、昔の圭塘玉山と相埒し。銭塘の厲太鴻徵君（鶚）、陳授衣（章）、帰安の姚玉裁秀才（世鈺）皆其の家に館す。

前半は、馬氏の蔵書の素晴らしさ、そこで刊行される出版物の精緻さを述べ、また四庫全書編纂に際して蔵書を提供して古今図書集成を賜ったことで、『淮海英霊集』と重なる。その後に、揚州以外の広い地域からの客人が馬氏のもとで連日倡酬を行い、韓江吟社を結成したことを記す。これは馬氏の客人であった、杭州人陳章の「沙河逸老小稿序」を借りたものである。邗江吟社が結成され、客人友人が唱酬する様が、元の許有壬が圭塘別墅で開いた詩会、顧瑛が玉山草堂開いた詩会、という歴史的な詩会に匹敵すると称されたとし、馬氏の韓江雅集（邗江吟社）が社会的に高い評価を得ていたことを述べる。

さらに『広陵詩事』巻七では、先に挙げたように「馬曰琯（秋玉）、曰璐（半査）兄弟並好客、主持風雅、勒其朋侶游宴之詩為韓江雅集十二巻。」（『広陵詩事』巻七）と、詩壇の主催者であり、仲間との詩宴の詩集として『韓江雅集』を刊行したことを記している。

さて、韓江雅集の主催者の中心は、馬氏兄弟であるが、

他にも馬氏の屋敷の向かいにあった園林の所有者である陸鍾輝、張四科もまた主催者とて場を提供している。『広陵詩事』には、張四科「讓圃記」全文を記載するのであるが、その中に次のようにある。

落成之日、置酒高会、自都御史胡公而下、凡十六人。詩社之集、于斯為盛。自是二十年来、春秋佳日、選勝探幽、多在于此。四方文人学士、知有韓江雅集者、未嘗不従遊于行庵讓圃間、賞其地之勝、而慶余輩之獲結隣也。……乃未幾而同人凋喪殆半、前年夏、嶰谷亦帰道山。近南圻復移家金陵、惟余与半査及二三知旧、消声匿跡於荒林老屋之中。友朋文酒之楽、非復曩日矣。

（阮元『広陵詩事』巻六[12]）

落成の日、置酒高会し、都御史胡公よりして下、凡そ十六人。詩社の集、斯に于て盛と為す。是より二十年来、春秋佳日、選勝探幽、多く此に在り。四方の文人学士、韓江雅集有るを知る者、未だ嘗て従ひて行庵讓圃の間に遊ばずんばあらず、其の地の勝を賞して、余輩の結隣するを獲るを慶ぶなり。……乃ち未だ幾ならずして同人凋喪して殆ど半ばし、前年の夏、嶰谷も亦た道山に帰す。近ごろ南圻復た家を金陵に移し、惟だ余と半査及び二三の知旧と、荒林老屋の中に消声匿跡す。友朋文酒の楽、復た曩日に非ず。

これは張四科が馬曰琯の死後に記したものであり、当時韓江雅集を知って四方から人が訪れ、馬氏の行庵、張四科の讓圃で詩宴に参加したことを述べ、韓江雅集の詩人が世を去ってからは揚州詩会が衰退したことを記している。ここにも、詩会に「四方文人学士」と、他郷らかの詩人達が多く参加したことが記される。　張四科も詩会の主催者といえるが、陝西臨潼の人であるため、『淮海英霊集』には載らず、『広陵詩事』でも、「讓圃記」にのみ詩会に関する記述が見える。一方、張四科とともに讓圃を運営したのが陸鍾輝であり、彼は揚州人として『淮海英霊集』に記載がある。小伝の中の詩会の記載をみると以下のようにある。

陸鍾輝、字南圻、一字渟川、江都人。……初有鬻地于張漁川者、継又鬻于南圻、南圻後知之、以讓于張、張亦不受、讓于陸、馬秋玉徵君為之解、乃共構一園、名曰讓圃。……与行菴並為邗江雅集之地、今天寧門外少西北、杏園一帯、其故址也。

（『淮海英霊集』乙集巻三）

陸鍾輝、字は南圻、一の字は渟川、江都の人。……初め地を張漁川に鬻ぐ者有り、継いで又た南圻に鬻ぐ、南圻後に之を知り、以て張に讓るも、張も亦

た受けず、陸に譲り、馬秋玉徵君之が為に解し、乃ち共に一園を構へ、名づけて譲圃と曰ふ。……行菴と並びて邗江雅集の地と為す。今天寧門外少西北、杏園一帯、其の故址なり。

陸鍾輝が張四科と共に譲圃を経営し、そこが馬氏の行庵とともに詩会の場となったことが記される。『広陵詩事』には、陸鍾輝と詩会に関する記載は、張四科「譲圃記」以外にはない。

韓江雅集の詩人であり、自身も篠園を経営し、そこで詩会が開催されたという程夢星については、『淮海英霊集』に詩会に関する記述が見える。

程夢星、字午橋、号洴江、江都人。……宦情早淡、丁内艱帰、築篠園並漪南別業以居、不復再出。揚州為東南都会、民物滋豊、人有余力、当時名流賢士、流寓者多、太史主盟壇坫。（『淮海英霊集』甲集巻四）

程夢星、字は午橋、と号し、江都の人。……宦情早に淡く、丁内艱もて帰り、篠園並びに漪南別業を築きて以て居り、復た再びは出でず。揚州は東南の都会為りて、民物滋豊、人に余力有り、当時名流賢士、流寓する者多く、太史壇坫を主盟す。

程夢星もまた塩商であるが、進士及第を経て、翰林院編修という重職についていた。母親の死を理由に辞職し揚州に帰ってからは、流寓の詩人を招いた詩壇の主催者となったという。『広陵詩事』の中では、「聯句之盛、莫過於馬氏小玲瓏山館、程氏今有堂、張氏著老書堂。」（『広陵詩事』巻七）と記されているが、聯句は詩会で作られるものであり、馬曰琯、曰璐の小玲瓏山館の他、程夢星の今有堂、張世進の著老書堂を詩会の地と聯句が作られたこと、また参加詩人の名を列挙し、揚州詩壇の隆盛ぶりを伝えている。

こうしてみると、詩会の主催者については、『淮海英霊集』では、詩会に関わったことは多くはないが、確かに記している。ただしそれに関わった詩人たちや、当時における評価などは記されず、個人に関わる事実のみを記す。『広陵詩事』では、詩会に多くの他郷の人が参加したことを具体的に示し、その規模の大きさ、隆盛ぶりや当時における評価などが記され、揚州という地における出来事としての記載となっている。

次に、揚州以外の詩人の記録を見てみよう。

七、『韓江雅集』の浙江人の記録

『韓江雅集』での収録回数が多いのは、杭州詩人陳章の九十二回で、馬曰璐の九十回、馬曰璐の八十二回を超える。

陳章については、『広陵詩事』の参加者として巻七にその名が登場し、また同じく巻七に詩会の聯句の参加者としてその名が登場する。また、『広陵詩事』で馬曰琯記し

たところに、「銭塘厲太鴻徵君（鶚）、陳授衣（章）、帰安姚玉裁秀才（世鈺）皆館其家。」（『広陵詩事』巻三）と、馬氏宅に寄寓した浙江人の一人として記されるが、彼の活動に関する記述はない。『広陵詩事』はあくまでの揚州人中心の『淮海英霊集』の補であり、中心を揚州人とする思想は変わらない。阮元より少し前に刊行された李斗『揚州画舫録』巻四には、韓江雅集の詩人として陳章の伝記を載せている。『揚州画舫録』は、揚州詩会で活躍した揚州外の詩人を羅列し伝記を詳細に記し、それを通じて揚州詩壇の多彩さを示す方針を取っており、阮元とは正反対である。阮元は『揚州画舫録』に序をつけており、内容が重ならないよう編纂方針を考慮したのかもしれないが、それを示す証拠はない。

では、故郷浙江の詩集である『両浙輶軒録』には陳章はどのように記録されているのであろうか。

陳章、字授衣、銭唐人。有銭唐懐古詩。（『両浙輶軒録』巻十八）

陳章、字は授衣、銭唐の人。銭唐懐古詩有り。

この一行だけである。陳章には、『孟晋斎集』二十四巻があり、『乾隆杭州府志』巻五十九芸文にも記載がある。しかし『両浙輶軒録』には詩集の記載もなく、全く簡素な扱いである。揚州にいたことは無論記載がない。

しかし陳章は決して無名の人ではなかった。全祖望は「竹町居士陳授衣章、以詩名大江南北者、幾三十年、而不遇。（竹町居士陳授衣章、詩を以て大江の南北に名あること、幾ど三十年にして、遇されず。）」（全祖望『鮚埼亭集内編』巻三十二「宝甎集序」）[13]と、詩で各地に名を知られたことを記しており、また杭世駿は陳章の弟陳皐の詩集に送った序に「与賢兄竹町闌入韓江雅集。……広陵社事繁興、程翰林午橋、張主事漁川、汪員外対琴、江藩伯鶴亭、開設壇坫、争以得対鷗兄弟為勝。（賢兄竹町と韓江雅集に闌入す。……広陵社事繁興にして、程翰林午橋、張主事漁川、汪員外対琴、江藩伯鶴亭、壇坫を開設し、争ひて対鷗兄弟を得るを以て勝と為す。）」（『道古堂文集集』巻十一「吾尽吾意斎詩序」）と記している。揚州詩壇の程夢星、張四科、汪棣、江春ら、豊かな財力をもとに揚州詩壇を盛り立てた塩商らが争って手に入れたがったのが、陳章、陳皐兄弟だというのである。ところが、『両浙輶軒録』では陳章の記録は上記の通り記録ともいえぬものであり、弟陳皐にいたっては、『補遺』にも採録されない。

この原因は、陳章陳皐兄弟が、浙江にほとんどいなかったためと考えられる。『両浙輶軒録』の凡例には、編纂の資料に用いた総集が列挙されている。松村昂は、それについて「阮氏が参考に用いた総集は、すべて浙人の編輯によるものである。」[14]と指摘している。陳章は長く揚州に住み、馬氏に入り婿として迎えられ、揚州に居住し、杭州には帰らなかった[15]。揚州に住みついても、阮元の

基準では揚州人とされることはなく、『淮海英霊集』には彼の活動に関する記載はなく『広陵詩事』にも陳章自身に関する記載はほとんどない。また浙江にいなかったために、浙江の記録である『両浙輶軒録』には、彼の記録らしいものが残されない。同時代に刊行された浙江の『全浙詩話』、揚州の『揚州画舫録』には陳章の伝記や詩に関する記録が残っているが、阮元は地域を厳しく分けたため、陳章のような流寓の詩人は、移動先の記録からも、故郷の記録からも漏れていくことになったのである。最も信頼できる地域詩文献として評価される阮元編纂の詩集、詩話は、実は移動した詩人たちの記録を切り捨ててしまうという大きな問題があった。

陳章とともに馬曰琯の元に滞在した詩人、姚世鈺をみてみよう。姚世鈺は『広陵詩事』巻三に「乾隆初、揚州詩人有前五君詠、為胡復翁中丞（期恒）、唐南軒太史（建中）、方上舎（士庶）、厲孝廉（鶚）、姚秀才（世鈺）。」と、揚州を代表する前五君の一人として載っており、揚州での活躍のほどがうかがえる。では、『両浙輶軒録』ではどう記録されるのだろうか。『両浙輶軒録』巻二十一には、姚世鈺に関する全祖望「壙志銘」、沈徳潜「略志」、法式然『梧門詩話』、朱文藻『全祖望年譜』などから資料を引き、多くの記載がある。しかし、揚州に関する記述はない。実は、全祖望の『鮚埼亭集内編』巻二十「姚薏田壙志銘」には、「晩年益刊落枝葉所得粋然、授徒江都、遂卒焉。吾友馬曰琯、曰璐、張四科為之料理其身後、周恤其家、又為之収拾其遺文、将開雕焉。（晩年益ます枝葉を刊落し得る所粋然たりて、徒を江都に授け、遂にここに卒す。吾が友馬曰琯、曰璐、張四科のが為に其の身後を料理し、其の家を周恤し、又之が為に其の遺文を収拾して、将に開雕せんとす。）」と、揚州に滞在し、揚州詩会の主催者が彼の詩集を刊行したことを載せているのだが、『両浙輶軒録』は、この文章を引用しながら、この部分の記述を省いている。よって、姚世鈺の揚州での姿は全く見えず、揚州にいたことすらわからない。揚州の『韓江雅集』には、二十首を採録され、その活躍ぶりがわかるのだが、詩会そのものに関する記録も全く見えない。

揚州で同じ前五君とされた厲鶚が、陳章・姚世鈺と異なるのは、彼の著作の大半が、馬曰琯の蔵書を元に編纂されたことがよく知られており、また揚州滞在も三十年に及ぶため、彼の人生を記すには、揚州に触れないわけにはいかない。『両浙輶軒録』巻二十一の厲鶚の小伝は『乾隆杭州府志文苑伝』を引用するが、これは元々汪沆の「樊榭山房文集序」から取られている。そこには揚州のことが記される。

客遊揚州、有馬氏蔵書最富、延至其家、遺文秘牒、無所不窺。故其発為詩文、削膚存液、辞必己出、以清和為声響、以恬淡為神味、考据故実之作、搜瑕抉隠、仍寓正論于叙事中、読者咸斂手懾服。数十年、大江南北所至、多争設壇坫、奉為盟主。

揚州に客遊し、馬氏蔵書の最も富む有り、其の家に延至し、遺文秘牒、窺はざる所無し。故に其れ発して詩文を為り、削膚存液、辞必ず己より出で、清和を以て声響と為し、恬淡を以て神味と為し、考据故実の作、瑕を搜し隠を抉き、仍ほ正論を叙事中に寓し、読者咸な斂手懾服す。数十年、大江南北の至る所、多く争ひて壇坫を設け、奉じて盟主と為す。

ここでは揚州馬氏の蔵書を元に詩を作ったことが記されており、また各地の詩壇で盟主としてあがめられたことが記される。しかし、最も活躍した揚州詩会についての記載はない。これは元々が文集の序であったためということもある。しかし他に『詞科掌録』『蓮坡詩話』など様々な資料を引用しているにもかかわらず、揚州の詩会活動の部分を引用することがない。

最後に、揚州と浙江を行き来し、厲鶚とともに各種書籍の編纂に携わり、自らも多くの著作を残した全祖望の記録を見てみよう。『両浙輶軒録』巻二十二に全祖望の小伝と詩が収められる。小伝における揚州の記述は、『詞科余話』からの引用の「時往来武林維揚間。」のみである。詩会に関する記述もないが、採録される詩に「韓江詩社浙中四寓公予焉。樊榭、堇浦、薏田与予也。然前後多参錯、予不到韓江二十年矣。今夏之初、館於嶰谷畬経堂中、同人喜予之至、而惜三子之不偕、即席奉答」と題する詩を載せており、韓江詩社に身を寄せた四寓公として、厲鶚、杭世駿、姚世鈺、全祖望がいたことがわかる。これが揚州詩会での活動を記す唯一の資料となる。四寓公のうち、杭世駿については、実は揚州での滞在期間は短かったので、今回は取りあげない。

さてこうしてみてみると、流寓の詩人として揚州詩会で活躍した浙江詩人の最も活躍した姿は、移動先の記録にも、故郷の記録にも残されていないという事実がわかる。揚州詩人の活動を記録することを目的とした揚州の地域詩集、地域詩話に浙江詩人の活動の記録が残らないのは当然としても、故郷の記録も残らないという事実は彼らにとって不幸であったといえよう。地域詩総集が、その地での活躍を記すことに重点を置き、他郷での記録を載せない傾向が強かったため、結局移動した詩人の活動の大半は記録から消えてしまったのである。これはあくまでの地域詩総集は、当該地域での活躍を伝えるもの、というのが阮元の編纂方針であったためである。よって、詩の活動の大半が揚州詩会であった陳章、姚世鈺は、『両浙輶軒録』の中では、揚州での人気や活躍ぶりが記録されず、当時の高い評価や人気を知る手段はなく、厲鶚や全祖望ほどの著名人でも、他郷での活躍は記録に入れられないため、彼らの活動の大半が記録から消えてしまっているのである。

清代初めから中期にかけて、杭州を始めとする浙江詩人達は、多くが揚州や天津など他の地域に移動し、そこで活動を行った。それらの詩人は、著作を残した厲鶚や

全祖望を除いては、その後詩人としての名は消滅していってしまった。その一因が、この地方を区切っての記録にあったといえる。しかし一方では、浙江の詩人が各地の詩壇で求められたのは、その地の地方志に載せる詩を制作するという役目のためでもあった。各地の地方志に浙江詩人の詩は古蹟・風俗を詠ずるものとして、実に頻繁に登場するのである。よって、地方志の時代が彼らの生活を支えたという一面もある。阮元の地方志文献は、地方志編纂の時代に生きた詩人たちの過酷な宿命を克明に映し出すものといえよう。

七、特殊な詩人

さて、『韓江雅集』に登場する詩人の中に、唯一『淮海英霊集』にも『両浙輶軒録』にも記載される詩人がいる。釈明中である。明中は、杭州浄慈寺の僧として知られ、杭州詩会で活躍した。生まれも浙江である。『韓江雅集』には一首が収録されるのみであるが、なぜ『淮海英霊集』に収録されたのだろうか。

明中、字大恒、号茨虚、浙江石門人。七歳投楞厳寺為僧、嘗侍憲皇帝講禅学。雍正乙卯放還、久住揚州、晩年住杭州浄慈寺。乾隆乙酉、上南巡、賜紫、又賜詩云、……。戊子春病没、銭塘梁山舟太史同書、刊其詩三巻、為茨虚大師遺集。

（『淮海英霊集』癸集巻一）

明中、字は大恒、茨虚と号し、浙江石門の人。七歳にて楞厳寺に投じて僧と為り、嘗て憲皇帝に侍して禅学を講ず。雍正乙卯放還せられ、久しく揚州に住み、晩年杭州浄慈寺に住む。乾隆乙酉、上南巡し、紫を賜はり、又詩を賜はるに云ふ、……。戊子春病没し、銭塘梁山舟太史同書、其の詩三巻を刊し、茨虚大師遺集と為す。

明中は、生没ともに浙江であり、修行した寺も晩年にいた寺も浙江の寺であるにも関わらず、一時揚州に住んだということで採録している。これは凡例にあった生没が揚州である、という基準に反するものでる。また、収録する詩に揚州詩人との倡和を示すものがあり、揚州を訪れたのは確かなようだが、阮元のこの記載以外に、明中が揚州に長期滞在したことを示す記録は地方志には見当たらず、明中を揚州人として扱うのは違和感がある。乾隆帝の南巡を迎えたのも、実は杭州での出来事である。このような人物を揚州の詩集に記録した理由として考えられるのは、明中が清朝皇帝に礼遇されたことである。揚州人の阮元は、清朝の重んじる人物であることから、僅かな関連であっても、揚州の記録の収めようとしたのではないだろうか。それは、先に述べたように、乾隆朝から厳しい監視を受けていた江蘇地域であることも大きな要因であると掩われる。比較のため、『両浙輶軒録』における明中の記録を見てみよう。

明中、字茨虚、住持杭之浄慈寺。銭陳群伝略曰、恒上人明中、七歳投楞厳寺為僧、梵誦之余、兼習書画。嗜為詩、無蔬筍気。主浄慈講席。……上四次巡浙、幸寺中、見子所題聯、即問、和尚也能作詩麼。上人跪奏云、臣僧曽学作詩。上頷之、因賜一絶句。杭世駿序略曰、西湖有二詩僧、一為亦諳、一為茨虚。亦諳癯而逸、茨虚秀而腴。亦諳主涵青院、与銭唐詩人陳撰玉几、符曽薬林、厲鶚樊榭相唱酬。亦諳没、而三人相継下世、不能伝其詩也。茨虚早侍内廷、荷両朝之恩遇、歴主聖因、天竺、浄慈、乾峰四道場、人密後、有詩数巻。

（『両浙輶軒録』巻三十九）

明中、字は茨虚、杭の浄慈寺に住持たり。銭陳群伝略に曰く、恒上人明中、七歳にして楞厳寺に投じて僧と為り、梵誦の余、兼ねて書画を習ふ。嗜みて詩を為り、蔬筍の気無し。浄慈講席を主る。……上四次浙を巡り、寺中に幸し、子の題する所の聯を見、即ち問ふ、和尚も也た能く詩を作るか、と。上人跪奏して云ふ、臣僧曽て詩を作を学ぶ、と。上之に頷き、因りて一絶句を賜る。杭世駿序略に曰く、西湖に二詩僧有り、一は亦諳為り、一は茨虚為り。亦諳癯せて逸、茨虚秀でて腴。亦諳涵青院を主り、銭唐詩人陳撰玉几、符曽薬林、厲鶚樊榭と相唱酬す。亦諳没して、三人相継ぎて世を下り、其の詩を伝ふ能はざるなり。茨虚早に内廷に侍し、両朝の恩遇を荷ひ、聖因、天竺、浄慈、乾峰の四道場に歴主し、人密の後、詩数巻有り。

ここでは、あくまでも明中は杭州の人である。唱酬の相手も、杭州詩人となっている。ここには乾隆帝との詩を巡るやりとりが詳細に記されている。浙江・揚州ともに乾隆帝から見て危険地域であり、ゆえに南巡の地として選ばれているのであり、浙江に赴任した揚州人の官僚としては、やはり皇帝の恩遇をうけた人物を記録しておく必要があったのだろう。これは、浙江に赴任した鄂敏が、西湖修禊を主催したときの詩集の序に、「昇平日久、海内殷富、商人士大夫慕古人顧阿瑛、徐良夫之風、蓄積書史、広開壇坫。」と、乾隆の世が栄えているからこそ、浙江の地で平和に商人士大夫の詩会が開かれる、と述べているのと同様の意図であろう。地域を越えて記録される詩人が、清朝に厚遇される人物である、というのは、地方志が皇帝に監視されていた時代を象徴するものではないだろうか。

さて、このように清王朝に愛される人物を詩集に入れるとなると、逆に清王朝が否定する人物は入れないことになる。『両浙輶軒録』の凡例の最初に、思想犯を記録しない、と述べていたとおりである。阮元は揚州と浙江という、清初に抗清運動が盛んだった地の地域詩文献をまとめるにあたり、極めて用心深く作業を進めたと考えられる。それは彼が地方志に資料を提供するために文献を

編纂していることと関わりがある。『清一統志』に資料を提供する地方志は、皇帝が直接審査していたことは、先にも述べた。当時の地域詩文献は単なる地方の詩集ではなく、清朝の意に沿うこともまた重要な役割であり、阮元は官僚としてそのことを強く意識した上で編纂事業を行ったのである。

八、おわりに

阮元の編纂した地域詩文献である『淮海英霊集』、『両浙輶軒録』は、地域詩総集として、他郷の詩人を排除する、当時としては珍しく、厳しく地域の区切り、他郷の詩人を排除した。揚州は、官僚でいえば王士禎、孔尚任、盧見曾ら、多くの著名人が活躍し、その詩会が有名であったが、彼らは詩集には記録されない。また『広陵詩事』には記録されるが、その場合も、主役の他郷の官僚ではなく、揚州の参加詩人を記録することに徹している。

紅橋為詩人聚集之地、王阮亭、宋荔裳皆嘗詠于此、後孔東塘在広陵時、上巳招同呉薗次綺、鄧孝威、漢儀、費此度密、李艾山沂、黄仙裳雲、宗定九元修、宗子発元予、査二瞻士標、蔣前民易、閔賓連、王武徴方岐、喬東湖寅、朱其恭、朱西柯、張諧石韻、楊爾公、呉彤本、卓近青爾堪、趙念昔允懐、王孚嘉、王楚士、王允文、閔義行共二十四人紅橋修禊、賦詩紀事。

（『広陵詩事』巻七）

詩会は、多くの詩人を記録する資料を提供してくれる場でもあった。そのため、『広陵詩事』は詩会を多く記録する。しかし、揚州で最も活躍した他郷の詩人達は記録らしい記録を残されず、また故郷での活動がないために故郷の記録からも消えてゆく、という厳しい現実があった。地域重視の時代の記録からこぼれ落ちていった彼らの記録を発掘し、当時の詩壇の姿を正しく浮かび上がらせる作業が、今後必要であると思われる。

注

[1]大沢顕浩「「詞章の学」から輿地之学」へ　地理書に見える明末～」は、『大明一統志』が文学作品の写作・鑑賞のためのもので、実用的なものでなかったことへの反発が明末にあったものの、清朝に入り、明末の実用を目指した地理書の系譜は伝えられることなく終わったことについて論じている。

[2]馬春暉『中国伝統方志　芸文志研究』（国家図書館出版社　二〇一五）は、明代から、地方志芸文志大量に収録されるようになったことを指摘し、その問題点が議論されるようになった実態を考察する。

[3]蔣寅「清代文学與地域文化」『清代文學論稿』（鳳凰出版社　二〇〇九）は「在修志中、地方文献的捜集和芸文志的編纂是最重要的工作、伴随修志而來的地方文献整理直接為地方文

学文献的編纂奠定了基礎。事実上大多数地域詩話的編撰或多或少都与修志有関。」と、地方志が地域詩話の編纂に関わったことを指摘する。

[4]黄燕生「清代方志的編修、類型和特点」（『史学史研究』第四期、一九九〇）に、「筆者據『中國地方志聯合目録』統計、在所収八千三百六十四種方志中、清代方志有五千六百八十五種、占七十%」とし、清代の地方志が歴史上最多を誇ることを指摘している。

[5]阮元の年譜としては、古くは張鑑等による『雷塘庵主弟子記』（一八八一）があり、これは『阮元年譜』（中華書局　二〇〇六）として刊行されている。王章涛『阮元年譜』（黄山書社　二〇〇三）は、張鑑らの「弟子記」を踏まえた上で、多種の資料を引用し、事蹟及び著作を詳細に記したもので、本稿ではこの年譜を主に参照している。この他、阮元の伝記には、郭明道『阮元評伝』（社会科学文献出版社　二〇〇五）、陳居淵『焦循阮元評伝』（南京大学出版社　二〇〇六）等がある。

[6]松村昂『清詩総集叙録』（汲古書院、二〇一〇年）

[7]阮元「淮海英霊集序」に、「乾隆六十年、自山左学政、奉命移任浙江、桑梓非遙、徴訪較易、遂乃博求遺籍、徧于十二邑。（乾隆六十年、山左学政より、命を奉じて任を浙江に移し、桑梓遙かなるに非ず、徴訪較や易く、遂に乃ち博く遺籍を求め、十二邑に徧し。）」とある。「桑梓」は故郷を指す。

[8]『清史稿』巻一百八選挙志に、「雍正四年、以浙人査嗣庭、汪景祺著書悖逆、既按治、因停浙江郷会試。未幾、以李衛等請、弛其禁。」とある。査慎行の弟査嗣庭が郷試で出題した問題文の記述と、汪景祺の文稿中の年号の記述に清朝を呪詛する内容があるとして、両者が投獄されたのが発端となった。『永憲録』巻四「停浙江士子郷会試」に「上諭。……浙江風俗悪如此。……応将浙江郷会試試停止。」とある。

[9]蔣寅前掲書「清代文学与地域文化」では、「無論詩集還是詩話、常都把流寓本地或歌詠本地風物的外地詩人的作品収羅進来。」「外地作者所写的歌詠本地風物的作品、他們的歌詠会成為当地地人引為驕傲的資本、広為伝誦、婦孺皆知。……当然更多地承担這部分任務的是地方誌、各級地方誌中的「芸文志」都収有題詠、記述本地風物名勝的詩文、這可以視為郡邑詩文集和詩話的一個補充。」と、地域詩集、詩話は流寓の人の詩を多く収録したということ、他郷からの流寓の人々が当地を詠ずることはその地の誇りであることを、王漁洋を例として述べている。

[10]松村昂前掲書

[11]黄燕生「清代方志的編修、類型和特点」（『史学史研究』第四期一九九〇）に、「《大清一統志》的編修歴康熙、雍正、乾隆、嘉慶、道光五期、経過了一百五十七年的漫長時間。在纂修過程中、皇帝多次過問、官員厳格把関。乾隆皇帝曽親自審閲文稿、提出修改意見。」と、乾隆帝が一統志について皇帝が自ら審査したこと、また「清朝統治者一方面倡導修志、另一方面又対各地志書厳格審査、乾隆間還詔令禁止私修志書。由于文網厳密、文字獄盛行。」と、地方志に対して厳正な審査を行っていたことを指摘している。阮元の地域詩文献の編

纂は嘉慶の始めであるが、当然この傾向を引き継いでいると考えられる。

[12]張四科『宝閑堂集』巻二に収録される。

[13]この文章は、『毛晋斎集』についている全祖望序と同じ文である『宝甄集』が孟晋斎集と同じかどうかは不明。

[14]松村昂前掲書。

[15]陶元藻輯『全浙詩話』巻四十九「雲蠖齋詩話、竹町館於広陵馬氏、既而為贅壻、遂家於揚。」とある。